

漁業経済学会 短 信

第38回漁業経済学会参加の印象

前 潟 光 弘(長崎大学大学院)

1

第38回大会は三重大学生物資源学部において6月1～2日の日程で開催された。筆者にとっての三重県は、鹿児島大学大学院時代に四日市市へ調査に訪れたのに続き2度目であったが、三重大学を訪れるのは初めてであり、キャンパスは広々とし、緑あふれる静寂な大学という印象であった。

2

大会第一日目は12名の個別報告が行われたが、今回も前回同様、メキシコ、インドネシア、フィリピン及びグアム等の海外漁業についての報告が多数有り、国内漁業についても多種多様の報告が行われた。

今回報告された12編の中で筆者が最も興味深かったのは、北海道漁業協同組合連合会の境一郎氏が報告された「戦後オホーツク沿岸におけるホタテガイ漁業管理」についてであり、特に猿仏においてホタテの天敵であるヒトデ、ウニの駆逐を行ったことにより、ホタテの大量自然発生が起こり、小型化、軽量化、生殖線の異常等も加わり、生産量が4万トから

1万ト台にまで落ち込んだという。その解決策として漁場を沖出しする事によって生産量の回復を達成したというが、筆者の個人報告の中での乗組員不足の解決同様、それは一時的な解決策であり、今後また同様の問題が発生すると思われる。そのための根本的な解決策を検討する必要がある。更に漁民参加資格制限問題についても興味深く聞かせていただいた。

また、これまで遠洋漁業(カツオ・マグロ)を中心とした問題とされていた外国人労働者問題についても、マレーシアや韓国からの労働者が沿岸漁業でも重要な担い手となってきているという東京水産大学水口憲哉先生の報告についても、筆者が勉強中の以西底曳網漁業への外国人労働者導入問題も含めて興味深い報告であった。

最後に、毎回報告の対象になる活魚についても、市場流通・市場外流通それぞれの面から報告がなされた。酒井亮介氏は活魚を「消費者の手まで活着しているもの」として定義づけ、関西・関東の比較等を交えながら報告され、1991年代は場外問屋にとって激動の年になるであろうとのことであった。報告の最後に「長崎の以西物の活魚は長崎では活魚として販売できるが、福岡では活魚として販売できないはずである」と言われた。筆者は「福岡でも活魚のはずである」と信じているが、よいテーマを与えていただいたと思い、今後調査をして結果を出そうと思っている。

大会第二日目は、「企業の漁業経営の存続

目 次

第38回漁業経済学会参加の印象

前潟 光弘	1
第38回漁業経済学会大会報告	2
在京理事会報告	4
編集委員会からのお知らせ	5
事務局からのお知らせ	5

条件—個別経営における先端部分の動向と展望—」をテーマとしたシンポジウムが開催された。各報告者より沖合底曳網漁業、かつお・まぐろ漁業、以西底曳網漁業、大中型まき網漁業についての報告がなされた。

筆者の今回の学会参加の目的の一つは、鹿児島大学の片岡千賀之先生報告の「以西底曳網漁業」をはじめとして、各中小漁業の展望及び存続条件について大会参加の会員の方々の活発な意見及び討論を聞くことにあった。しかしながら筆者の知識不足のせいも有るであろうが、各中小漁業における経営のよい企業の現状報告に終わってしまった感が強かった。日本漁業における中小漁業の存続条件及び展望についての論議が不足していたのではなかろうか。

今回のシンポジウムの特色の1つとして、コメンテーターが5名であったこと、うち2名が大学院生しかも留学生であったことであろう。各コメンテーターからは各視点に立ったコメントが出されたがここでは同じ院生ということもあり、京都大学の婁小波氏のコメントについ

て要点だけを記したい。彼は問題点を次のように3点上げている。まず始めに生産構造問題。特に、①価格条件、②労働力問題の再検討、③資源問題の再検討。次に経営体の内部組織問題。最後に国際視点からの問題。特に、①外国人労働力問題、②国際的関係諸国の協力体制問題。彼のコメントによる3点すべてをいかにクリアしていくかが、今後の中小漁業存続の大きなポイントとなるであろう。

3

大会の印象記を書かせて頂いたものの、全ての報告に以西底曳網漁業というフィルターをかけて聞かせて頂いたせいか、この印象記もその枠内での話になってしまったことをお詫び致します。

最後になりましたが、大会運営にご尽力されました学会事務局及び現地事務局の皆様、お疲れさまでした。また、筆者の一般報告後及び懇親会中などに数多くの先生方からアドバイスを頂きましたことを紙面を借りて御礼申し上げます。

事 務 局 報 告

◎第38回漁業経済学会大会報告

6月1日(土)～2日(日)の両日、三重大学において、第38回漁業経済学会大会が開催された。

第1日の一般報告では12題の報告があり、第2日のシンポジウムは『企業的漁業経営の存続条件—個別経営における先端部分の動向と展望—』のテーマで実施され、両日とも多数の参加者を得て、活発な討論が行われた。大会プログラムは次の通りである。

>一般報告<

1. メキシコの漁業制度に見られる資源ナショナリズムの影響とその意義
鹿児島大学研究生 亀田 和彦
2. インドネシアのサメ漁業の経済とその特質
—インドラヌ、カラツツ村を事例として—
愛知学泉大学 鈴木 隆史
3. ウナギ養殖業の展開過程
—ウナギ販売価格の分析を中心として—
農林中金総合研究所 大塚 秀雄

4. ハワイエコノミクスの視点によるケージ養殖経営に関する多変量分析 —フィリピン、サハ・ロツ湖の事例研究—

筑波大学大学院 さいたつ L. けん
筑波大学 樋口 貞三

5. 外国人労働者と沿岸漁業
東京水産大学 水口 憲幸
6. 以西底曳網漁業経営の展望
—平成元年前後の体質的变化—
長崎大学大学院 前潟 光弘
7. 遠洋マグロ延縄経営の再編と根拠地における主力層の諸対応 —気仙沼地区の事例—
東京水産大学 廣吉 勝治
8. グアム島水揚空輸販売の中間経費について
—近海マグロ漁業の事例—
富士大学 中井 昭
9. 中央卸売市場における活魚流通の特徴と役割
中央水産研究所 三木 克弘

10. 活魚流通の商的側面

大阪中央卸売市場市場協会 酒井 亮介

11. 戦後オホーツク沿岸におけるホタテガイ漁業管理

北海道漁業協同組合連合会 境 一郎

12. 共同漁業権について

鹿児島大学 田平 紀男

> シンポジウム <

テーマ：『企業的漁業経営の存続条件 - 個別経営における先端部分の動向と展望 -』

1. 稚内に於ける沖合底曳網漁業の経営

稚内機船漁業協同組合 濱崎 旨男

2. かつお・まぐろ漁業の経営環境対応

三重県近カツ協 岩崎 洋右

3. 以西底曳網漁業

鹿児島大学 片岡 千賀之

4. 大中型まき網漁業経営の存続条件

東京水産大学 大海原 宏

コメンテーター：

板倉信明，妻小波，宮澤晴彦，ジヨン T. ス
ブロー，濱田英嗣

総合討論，司会：秋谷重男，廣吉勝治

> 総会議事 <

1991年6月1日午後1～2時に総会が開催された。議長に境一郎氏を選出し，大海原宏代表理事の挨拶の後，下記の議事について審議した。

1. 1990年度事業報告

1990年度の活動報告，会誌発行（90年度は4号発行），短信発行等。

2. 1990年度会計決算報告，監査報告（資料1参照）

会費未納者の督促を行い，会費納入状況の改善が図られた。

3. 1991年度事業計画案

第39回大会開催地；東京（開催機関は未定），シンポジウムテーマについては，沿岸域の多目的利用問題，漁協問題，「優良」魚種（サケ，ハマチ等の過剰問題，中小漁業問題Part II等の意見が出されたが未定。その他，会誌編集方針，短信発行方針等が審議された。

4. 1991年度予算案（資料2参照）

※会費：一般会員7000円，院生学生会員4000円

5. 学会賞選考委員会報告及び学会賞授与

・学会賞 該当者なし

・学会奨励賞 三輪千年氏（コラム参照）

6. 次期役員の出選理事（順不同，敬称略）

秋山 博一，浦城 晋一，内藤 一郎，

○長谷川 健二，高山 隆三，中井 昭，

長谷川 彰，柿本 典昭，倉田 亨，

大海原 宏，○三輪 千年，小野 征一郎，

○榎 彰徳，志村 賢男，八木 庸夫，

○三木 克弘，鈴木 旭，増田 洋，

大島 襄二，加瀬 和俊，岩切 成郎，

○中居 裕，○島 秀典，堀口 健治，

中 楯 興，○濱田 英嗣，大崎 晃，

○片岡 千賀之，○馬場 治，池田 均，

○服部 昭，○増井 好男，○田坂 行男，

○多屋 勝雄，古林 英一，廣吉 勝治，

○宮澤 晴彦，秋谷 重男。

○印は常任理事

監事

米田 一二三，赤井 雄二

第1回理事会（新理事）において，鈴木旭氏（北海道大学水産学部）を代表理事に選出した。

7. 学会賞選考委員の出選

秋谷重男，鈴木旭，長谷川彰，廣吉勝治の各氏を改選し，小野征一郎，八木庸夫両氏は留任する。新たに増田洋，中井昭，浦城晋一，片岡千賀之の4氏（次点，大海原宏，倉田亨）を選出した。

◎在京理事会報告（1991.6.18）

・学会誌編集委員会について

総会で決定された方針にしたがって年4回の発行や，学会発足40周年に係わる編集が可能か等について議論することが報告された。

・次回大会のシンポジウムテーマについて

全国理事会に引き続いて議論を続けた結果，沿岸域の多目的利用について数年間継続して行うことでは大方の同意を得たが，より具体的なテーマ設定については多様な意見が出たため，担当の小野理事が中心となって事務局案を秋口までにまとめることになった。指摘された主な論点は以下のとおりである。

中高級魚の生産過剰問題，沿岸漁業での労

資料 1 1990年度決算報告 (1990.4~1991.3)

1 収入の部

2 支出の部

(円)				(円)			
科 目	予 算	決 算	増減	科 目	予 算	決 算	増減
会 費	1,500,000	1,636,000	136,000	会誌印刷費	1,970,000	2,044,207	74,207
カンパ	200,000	276,000	76,000	通信発送費	200,000	182,678	-17,322
会誌売上	150,000	393,600	243,600	事務局費	50,000	27,448	-22,552
大会収入	120,000	276,000	156,000	会 議 費	100,000	98,420	-1,580
寄 付 金	450,000	100,000	-350,000	大会経費	250,000	228,251	-21,749
雑 収 入	200,000	258,854	58,854	負 担 金	42,000	1,000	-41,000
小 計	2,620,000	2,940,454	320,454	雑 費	10,000	0	-10,000
前期繰越金	599,455	599,455	0	小 計	2,622,000	2,582,004	-39,996
				繰 越 金	597,455	957,905	360,450
合 計	3,219,455	3,539,909	320,454	合 計	3,219,455	3,539,909	320,454

3 財産目録 (一般会計)

4 財産目録 (特別会計)

郵便貯金	9,556
銀行預金	482,993
現 金	465,356
合 計	957,905

郵便貯金	750,000
計	750,000

資料 2 1991年度予算 (1991.4~1992.3)

1 収入の部

2 支出の部

(円)	
科 目	予 算
会 費	1,581,000
カンパ	200,000
会誌売上	200,000
大会収入	180,000
寄 付 金	800,000
雑 収 入	50,000
小 計	3,011,000
前期繰越金	957,905
合 計	3,968,905

(円)	
科 目	予 算
会誌印刷費	2,100,000
通信発送費	200,000
事務局費	50,000
会 議 費	120,000
大会経費	250,000
負 担 金	84,000
雑 費	10,000
小 計	2,814,000
繰 越 金	1,154,905
合 計	3,968,905

働や資本の過剰問題、漁業と漁業以外の沿岸域利用問題、海洋の外部経済的価値の問題、等

・学術会議の会員選挙結果

有賀祐勝氏と平野礼次郎氏が新会員に選出されたことが代表理事から報告された。

・40周年記念事業について

開催することが了承され、開催場所や実行委員会の組織などについてこれから詰めていくことになった。

・定年制について

アンケート調査等を実施して会員の意向を確認したうえ、来年の大会までに事務局案を作る方向で検討することになった。

学会誌編集委員会からのお知らせ

(1) 6.18在京理事会にて下記の会員が今期編集委員となることが決まりました。

堀口健治(早大)、秋谷重男

大崎晃(川村学園大)、池田均(北海道学園大)

大海原宏(東水大)、片岡千賀之(鹿大)

田坂行男(外食総研)、浦城晋一(三重大)

中井昭(富士大)、長谷川彰

三輪千年(海上労研)、廣吉勝治(東水大)

今期も論文投稿の促進、地方における研究状況の反映、論文審査作業の円滑化等の意義があるとの判断で、在京外からも編集委員をお願いすることとなりました。浦城、池田、片岡の各氏です。

なお、編集委員長は秋谷、編集総務は廣吉、編集総務補佐として佐野雅昭(中央水研)がそれぞれ担当することとなりました。従って、編集関係の照会等は廣吉か佐野宛にお願いします。

(2) 7.3第1回編集委員会報告①36巻1号が7月

中に入稿となります。宮崎隆志、古林英一、亀田和彦等の論稿です。9月下旬か10月上旬には刊行される予定です。

②36巻2号は第38回大会シンポジウム特集号の予定です。8月24日原稿〆切ですので各講演者は厳守して下さい。

③36巻3号は木南・浦城論文ほか数編を予定しています。

④今期中(1993年3月まで)に年4回刊行の方向を心がけることで一致しましたが、少なくとも7号分は刊行したいと考えております。

⑤「学会40周年記念号」、及び「特集号」の企画については引続き審議することとなりました。

⑥第38回大会での一般報告者をお願いいたします。早速、原稿にされて投稿して下さい。その他、「書評」や「研究動向」等の投稿を歓迎します。

事務局からのお知らせ

> 会員動向<

・新入会員の紹介(敬称略 順不同)

下記の方々から入会の申し込みがありましたのでお知らせいたします。

小 岩 信 竹 東京水産大学

峯 岸 ななえ 東京水産大学大学院

・物故者

池 田 郁 夫

・住所録の訂正

伊藤 康宏 〒690松江市西川津町831-1

諸田宿舎3

張 瑛秀 〒144 大田区蒲田本町1-1-4-814

(03-3736-1967)

張 設 鎬 釜山水産大学校水産経営

鶴田 正裕 (株)センエイ(0724-37-5391)

狩野伊知郎 INFOFISH Kuala Lumpur MALAYSIA

地井 昭夫 〒731-51 広島市佐伯区隅の浜2丁目4-7-302(0829-23-4932)

妻 小波 〒606 京都市左京区修学院登内
町15 八川忠夫方
(075-702-8363)

淀江 哲也 Embassy of Japan
Kalaskry Pereulok 12, Moscow,
USSR

菅沼 一夫 〒254 平塚市中原
(0463-35-0894)

> 寄贈文献<

学会事務局に、次の文献が寄贈されました。
御礼と共に報告いたします。

文献名：南西海区水産研究所報告第24号

寄贈者：南西海区水産研究所

> IAAEの養殖分科会と、漁業管理の

国際シンポジウムのお知らせ<

8月下旬から9月上旬にかけて、漁業経済学
に関連した国際的な集会在東京で相次いで開
かれますので御誘い申し上げます。詳細は同
封の別紙を御参照下さい。

> 会費納入のお知らせ<

納入がまだの方は速やかな入金にご協力い
ただき、滞納のないよう切望いたします。

> 次回シンポジウムに関するお願い<

次回第39回大会シンポジウムテーマに関す
る要望、意見、情報（会員のテーマ関連研究
や関連資料、コメンテーター・講演者の推薦）
等がございましたら事務局まで御一報下さい
ますようお願い申し上げます。

コラム：学会賞選考委員会報告

1990年度学会賞、奨励賞の選考結果は
次のとおりである。

1. 学会賞：該当者なし
2. 奨励賞：三輪千年（海上労研）

「漁業労働過程に関する研究」

選考経過：学会賞は出席委員（7名）全
員該当者なしで一致。奨励賞は選考理由
書を付しての推薦3名。電話による口頭
推薦1名をもとに審議した結果、三輪氏
に決定した。

船内労働編成・労働過程に関する一連
の実証分析を通じて漁業労働経済におけ
る新たな諸問題の解明に貢献したことが
評価された。

関連業績のうち代表的な著作は以下の
とおりである。

「小型イカ釣漁船における一人操業と
労働災害」漁業経済研究33-4, 1988, 4.

「船凍イカ釣漁船の船内労働過程 -
船内での生産と商品化の過程-」漁業経
済研究34-4, 1990, 5.

「漁業生産過程からみた労働力の国際
化-外国人船員との混乗をめぐる技術面
からの考察-」漁業経済研究35-2・3, 19
91, 2.

（大海原 宏）

学会短信 No. 64

1991. 7

事務局

〒108 東京都港区港南4-5-7

東京水産大学内

電話 03(3471)1251